

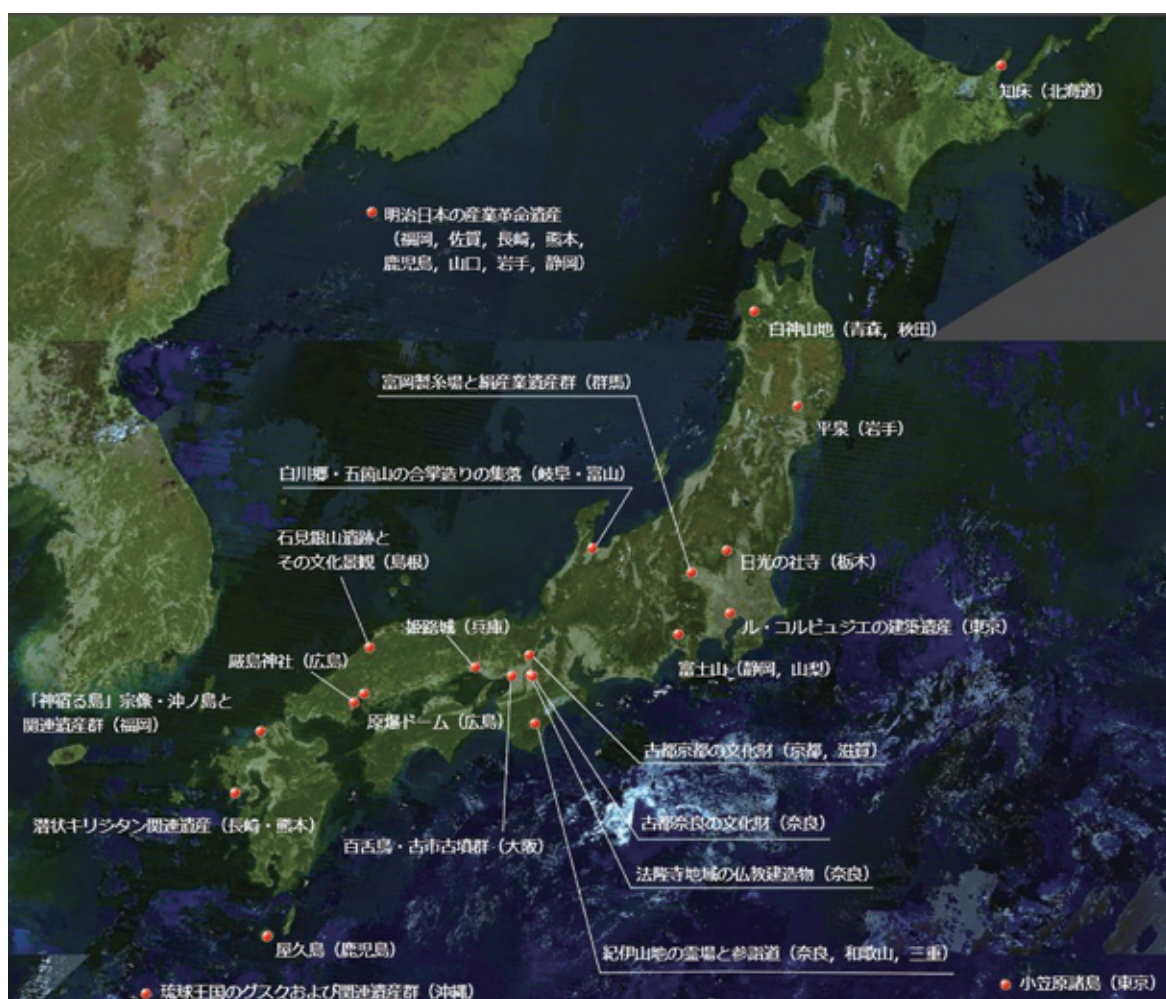
1. 広島と建築

1.1 文化の普遍的価値と広島

グローバル化が席卷する現代社会、私たちが自らの固有性やアイデンティティを確認する機会となる文化への希求はむしろ高まっている。その価値を普遍的に語ることは困難だが、いくつかの試みを例示することは可能であろう。それらの中で、最もよく知られている試みが、ユネスコの世界遺産かもしれない。世界190カ国以上が批准するこの枠組みは、人類共通の価値の保全を目指して定められたもので、2020年現在、全世界で800件あまりの文化遺産が登録され、日本国内には18件が登録されている。それらの内、8つの県に散在して遺産が存在する明治日本の産業革命遺産を除くと、複数の文化遺産が登録される県は、奈良県（法隆寺地域の仏教建造物、古都奈良の文化財）と広島県（厳島神社、原

爆ドーム)の二県だけである。遺産登録の無い県が過半の中、これは極めて異例のことである。

古代から日本の中央政権が置かれ、宗教や観光が地域産業の骨格を形作ってきた奈良県はともかく、広島県において遺産がこのような複数存在するのは、瀬戸内海の大動脈として古くから発展してきたことに加えて、そうした遺産を現在まで継承するとともに、それを愛し維持していく気概が人々の間に共有されているからとすることも出来るかもしれない。ここでは、そうした伝統を現代の行政の仕組みの中に取り入れた「広島県魅力ある建築物創造事業」について、その歴史的な背景から説明して行きたい。



出典：国土地理院ウェブサイト (<https://www.gsi.go.jp/>) ※広島県が加工し作成

注：ユネスコ世界遺産：1972年に成立した世界遺産条約に基づき、文化財、景観、自然など人類が共有すべき「顕著な普遍的価値」を持つ物件を登録する制度。移動が不可能な不動産を対象とし、文化維新と自然遺産に分けられる。登録は、厳重な審査の元で行われ、世界中で1092件（文化遺産845件、自然遺産209件、複合遺産38件、2019.7）。日本国内では18件の文化遺産、4件の自然遺産あわせて22件が登録されている（2019.7）。

1) 厳島神社

世界遺産に認定されている厳島神社は広島県廿日市市の厳島に位置し、推古天皇元年（593年）、地方の豪族であった佐伯鞍職が社殿造営の神託を受け社殿を創建したのが始まりとされている。その後、平氏の守護神として篤い信仰を寄せ、栄達を遂げた平清盛が神主の佐伯氏を援助して仁安3年（1168年）行った修造により、現代の姿になったとされている。その後、厳島詣が庶民の間で一般化することを通じて、広く知られるようになる。中世に入ると、従来の海の守護神としての要素に加えて夷神信仰が結びつき、瀬戸内海を往来する漁民や海軍、商人の厳島詣も盛んになる。江戸時代には伊勢詣や四国遍路と並んで西国の民衆の代表的な参詣地となり、厳島詣を描いた絵画作品も多数存在する。

厳島神社は後に再建と修繕が行われたが、修造当初の姿が忠実に守られている。平清盛は平安貴族の住居様式である寝殿造りの様式を神社建築に取り入れ完成させた。厳島神社は、瀬戸内海を「庭の池」、寝殿を「拜殿」に見立てた見事な発想で、平安の優雅さを表象すると共に瀬戸内海の大規模なスケールとも一体化が図られている。



2) 広島城と城下

広島城は1589年に豊臣政権五大老の一人でもあった毛利輝元（1553～1625年）によって築城された。毛利輝元の居城は防衛に適した山間部の吉田郡山城であったが、天下が安定するとともに海上交易路としても魅力的であった瀬戸内海に近い平地に築城することとした。築城に選ばれたのは太田川の河口にあった三角州で、豊臣秀吉（1536～1598年）の後ろ盾を得て2年後の1591年に完成を見た。当時の天守閣は毛利輝元によって作られたものであるが、1945年の原爆投下によって全壊し、現在の天守閣は、1958年の2度目の再建で復興された鉄筋コンクリート作りのものである。現在残っている表御門、御門橋、平櫓、多門櫓、太鼓櫓は1994年に復元された。

城下町広島は広島城を築城した毛利輝元及び福島正則によって計画されている。広島城下町はいくつもの河川が流れ洪水のリスクが大きかったが、水運を利用することで、商業・交通の中心地となり、西国随一の賑わいを見せていた。現在も「紙屋町」などかつての町名がそのまま使われ、西国街道はアーケード本通商店街として整備されるなど、かつての面影が都市構造に残されている。



広島市公文書館所蔵



国土地理院

1.2. 第二次世界大戦からの復興

1) 戦災復興都市計画

厳島神社と並ぶ世界遺産が原爆ドームである。この事例の価値は、原爆という悲劇的出来事を現在に伝承するといった本質的意義に加え、当初は保全される予定では無かったこの遺構を残すためになされた多くの市民の努力、さらには設計競技によって見いだされた枠組みにより、都市構造に遺構が再回収されている点にある。

1945年8月6日、広島市に投下された原子爆弾の被害は過酷なものであった。爆心地から1～2kmの区域がほぼ全壊全焼、2～3kmの区域がほぼ半壊半焼した。内務省(国土局計画課)が、県都市計画課に復興計画策定を指示し、1945年9月頃既に、非公式な復興基本計画の提示が行われる。本格的な復興計画は、広島市復興局が組織した広島市復興審議会によるもので会議は1946年2月25日から1948年3月まで22回開催されている。委員は各界代表者、学識経験者、地区代表者ら26名で、復興審議会にかけられた計画案はいくつかあったが、県都市計画課でまとめた案を市復興局で修正したものを原案とし、それを審議会が修正して決定された。土地利用や施設配置等については、復興院嘱託として広島市復興計画に関わった丹下健三や浅田孝らが、参考となるマスター

プランを立案している。

計画概要は以下の通りである。

- ①主要な幹線を幅員36～40mとし、通常の幹線を20～30mとして、広路とその南側2kmの2本の百米道路を含んでいる。計画決定街路は24路線、延長82kmに及んだ。
- ②土地区画整理は、21年9月に公布施行された「特別都市計画法」に基づいて実施され、約460万坪が計画決定、そのうち緊急に復興に要する400万坪(1325.5ha)を事業化した。
- ③公園緑地については、大公園3か所(101.2ha)、小公園32か所(66.35ha)を決定し、既設の緑地4か所(60.02ha)と合わせて230haの公園緑地が目指された。旧中島地区における記念公園もその中に位置づけられていた。
- ④計画は、その後いく度か変更が加えられたが、その基本的考え方の大部分は継承された。また、法定計画以外の内容についても多くの提案がなされ、取捨選択された。

参照：石丸紀典、戦災復興計画における計画思想とその都市形成に及ぼした影響に関する研究 - 広島市を例として - その1 都市の性格と人口に関して、日本建築学会論文報告集、第312号、昭和57年2月



原子爆弾投下前の空撮



原子爆弾投下後の空撮

2) 広島平和記念公園設計競技

設計復興計画において、旧中島地区が公園緑地として位置づけられたのを受け、広島市は1949年、平和記念公園の整備に関する設計案を募る設計競技を行う。この予算と一部国有地の拠出は「広島平和記念都市建設法」を根拠としていた。平和記念公園および平和記念館を旧中島地区北側の約12haおよび原爆ドーム周辺の敷地に計画することが求められたこの設計競技で1等になったのが、当時、東大で教鞭をとっていた新進気鋭の建築家、丹下健三であった。丹下案の特徴は、復興計画に定められたメインストリートの一つ、幅員100mの平和大通りと直行し、原爆ドームに交わる軸上に慰霊碑、資料館を計画するものであった。

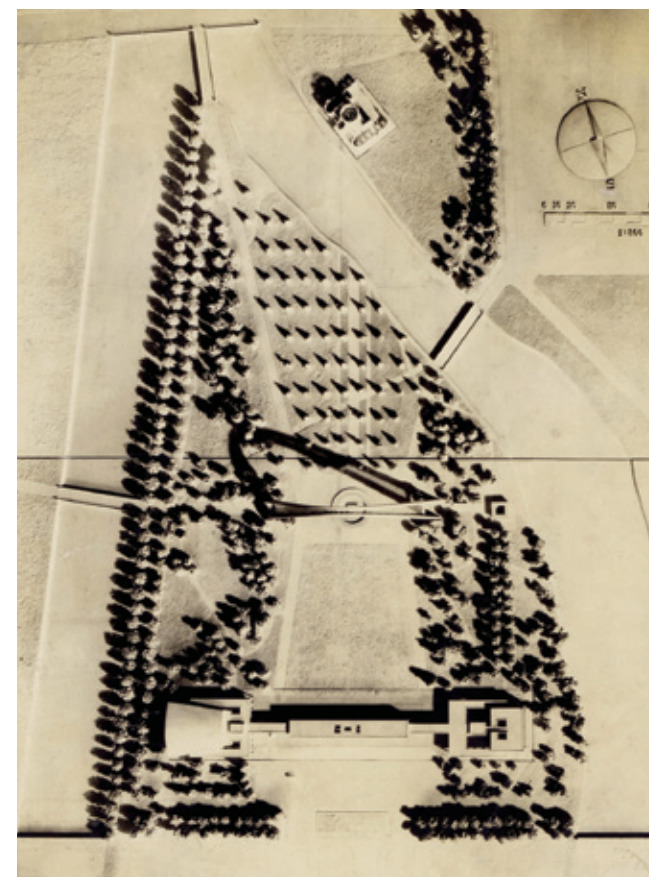
2等となった山下寿郎案では、軸を真東に向けて取り、多くの犠牲者が殺到した元安川を中心に平和公園のランドスケープを展開していた。3等の荒井龍三案は米軍がターゲットとしたT字型の相生橋を背にして記念館を建て、平和記念公園は平和大通りに向けて開くものであった。どちらもランドスケープに配慮した優れた提案であったが、平和記念公園、そして記念資料館を原爆ドームと関係づけて位置づけたのは、丹下案のみであった。広島平和記念公園は、悲惨な原

爆の記憶を継承するとともに平和への意思を体感できる場所として、広島県民のみならず、世界中から人々が集まる場所となり、広島市の都市骨格の起点となっているが、これはまさに、設計競技において、優れた才能を募り、丁寧に議論を行った賜物と言える。後述する広島型プロポーザルは、この意義を引き継ぎ、困難な現代社会において、自然の恵みを楽しみ、人々を勇気づける環境を構築する重要な施策でもある。

参考：arch-hiroshima (<https://arch-hiroshima.info/arch/hiroshima/p-museum.html>)
丹下健三+藤森照信著「丹下健三」新建築社



広島平和記念公園設計競技 1等～3等案 配置ダイヤグラム
参照：arch-hiroshima(<https://www.hiroshima-navi.or.jp/post/006127.html>)



広島平和記念公園設計競技 丹下模型

丹下健三について



(c) 齋藤康一

(1913年9月4日 - 2005年3月22日) 建築家、都市計画家。大阪府堺市生まれ、愛媛県今治市で少青年期を過ごす。東京大学大学院在学中に、大東亜建設記念造営計画設計競技で一等を取り頭角を現す。戦争のため、この計画は実現しなかったが、戦後、広島平和記念資料館の設計競技で一等を獲得。その優れた計画で、世界的に注目される。その後、国立代々木競技場第一・第二体育館、東京カテドラル聖マリア大聖堂、大阪万博お祭り広場などの歴史に残る建築を手がけた他、海外で多くの都市計画に関わる。1987年、日本人で初めて建築界のノーベル賞とよばれるプリツカー賞を受賞し、日本の建築人の実力を世界に知らしめた。晩年には、東京都庁の設計競技で最優秀となる。